



発行所
 社団法人 国民文化研究会
 (九州←→東京←→全国)
 東京都渋谷区東1-13-1-402
 振替 00170-1-60507
 電話 03-5468-6230
 F A X 03-5468-1470

月刊「国民同胞」編集部
 毎月一回10日発行
 購読料 年間2000円

「言葉の美しさ」を感じさせる教育を

柴田 悌輔

海の外の陸（つち）に小島にのこる民のうへ安かれとただいのるなり

冬枯れのさびしき庭の松ひと木色かへぬをぞかがみとはせむ

昭和二十年代に詠まれた昭和天皇の御製である。昭和天皇といふ方は「人の悲しみ」を「自分の悲しみ」として感じる事のできる方であったと、私は思っている。いやむしろさうした「心」を持つ事を、終生ご自分の任務と心がけてをられた方、と言った方がいいのかも知れない。

色を失つてゐる冬の庭にただ一本、鮮やかな「青色」を保つ松をご覧になって、改めてご自分の任務を想はれる昭和天皇の御心に、私は只々胸を打たれる。終戦後、大陸や太平洋

の島々から帰還できずにゐた人々の安否を気づかはれる昭和天皇の御心とは、「他を思ひやる心」そのものだらう。昭和天皇の「民を思ひやる心」は、このお歌に触れるだけで、素直に信じる事ができる。

「他を思ひやる心」をこの境地まで培ふのは、普通の人間には至難のことだらう。だが少しでもさうした心を養ふ「教育」は、意識してでも行はれる必要がある。今教育問題が喧しい。戦後様々なイデオロギーによって、破壊された教育の再生を語るのに、百家争鳴の様相である。だが六十年以上もの歳月を費やして、国ぐるみで行はれてきたと言つてもいい教育の崩壊が、幾つかの制度の改革程度で、修復が可能になるとは思はれない。北朝鮮に拉致された人々

の家族の悲哀に、多くの人々が無関心であつた。この人たちの「悲しみ」を共に悲しむ、「他を思ひやる心」を私たち日本人は見失つてゐたのである。かうした感受性を取り戻す事から始めなければ、「教育の再生」とは単に制度の改変だけに終るだらう。

この御製から「言葉の姿」の美しさを感じられる。言葉とは語られる内容ばかりが大切なのではない。語られる言葉が「姿の美しさ」を伴つてこそ、人の心は感動する。美しさに感動する「感受性」を育む方法は、もつと様々に工夫されていいはずだ。その一つに今は忘れられてゐる小学唱歌を、初等教育で活用するのも一法だらう。「村の鍛冶屋」「春の小川」「花」等々、遠い昔に覚えたものであるにも関らず、それらの歌詞は私の心にすぐに浮んでくる。これらの唱歌の歌詞は文語調で七音や五音の繰り返しが多い。

唱歌の歌詞は文語表現が多く、私などは当時意味が解らないままに、歌詞だけを覚えてゐた。意味のすぐ解る口語は伝達の用が済めばすぐに忘れられる。文語は言葉の姿が美しいから、意味は解らなくとも記憶される。意味を理解する事よりも大切なのは、言葉の美しさを感じる事で

はないだらうか。「言葉の美しさ」を感じさせる教育が、今最も忘れられてゐる事だと私は思ふ。

物に触れて感動した心を放置したままでは、いつかは記憶から消える。感動した心を言葉で表す為には、その感動した心を意識的に見つめ直す必要がある。感動は、意識的に見つめ直さうとする意思を働かせ、表現しようとする努力を伴はなければ、単なる感情経験に終つてしまふ。

冒頭の御製は昭和天皇の感情経験が和歌に表現されたものであり、その和歌に触れる者に感動を与へる。感情経験の内容も大切だが、それを表す言葉の美しさも大切なのである。さうした表現能力は美しい言葉の姿を敏感に捉へる感受性によつて培はれる。文語を基調とする唱歌に、幼い頃から慣れ親しむ事でも、その感受性は養はれる。だがかうした感受性とは意識して教へ続けなければ、いつか枯渇してしまふものではないだらうか。感受性を養ふ目的にさへ適ふならば、小学唱歌以外にも方法は幾つも考へられる。迂遠ではあつても、かうした具体的な方法を工夫する事こそが、教育の再生に繋がるものと確信してゐる。

(柴田代表取締役 数へ六十八歳)